

シンポジウム 4

日本の歯科免許第一号者
小幡英之助

樋口 輝雄

日本歯科大学新潟生命歯学部 医の博物館

医制に基づく医術開業試験は明治八年（一八七五）に、東京・大阪・京都の三府で、翌九年からは全国各地で実施されるようになり、当初は内外科（一般医科）の他、暫定的に内科、外科、産科、眼科、整骨科、「口中科」の専門科での受験も認めた。旧中津藩出身で、慶応義塾に学んだ小幡英之助は明治八年一〇月二日付で第四号の内務省医術開業免許を下付されたが、東京府初の受験者であり、歯科専門でも第一号であった。小幡は「洋方歯科医術の開祖」と冠せられ、旧幕以来の口中科や口歯科という名称を嫌い、「歯科」で出願したと史書は誌すが、八年一〇月一二日から六日間、東

京日々新聞に出稿した開業広告では自ら「口中療治」と謳っている。

「口中療治」小生事四年前ヨリ米国歯科医エリオット先生ニ従ヒ歯科一切ノ業ヲ学ヒ痛齒ヲ抜キ金銀粉ヲ以テ缺齒ヲ埋メ入齒ヲ植ヘ懸壅垂ヲ補ヒ汚齒ヲ磨キ齒竝ヲ直ス等ノ事ヲナスヲ以テ今般開業免許ヲ得東京采女町二六番地隈川宗悦方へ同居致シ専ラ歯科医術ヲ施シ候間貴客請フ来顧ヲ賜ヘ／小幡英之助」という一九字×九行の文中、采女町二六番地は、現在の中央区銀座五丁目一四番地（歌舞伎座の向かい）、隈川宗悦は成医会の創立メンバーで、医化学者隈川宗雄の養父でもある。

小幡英之助は嘉永三年（一八五〇年）生で、慶応義塾の塾長を務めた小幡篤次郎は叔父にあたる。その事跡は、今田見信氏の『小幡英之助先生』に詳しいが、挿話の数々は、明治四二年の没後、門弟たちからの伝聞が主となり、歯科史書の基本文献『歯科医事衛生史前巻』（昭和一五年）での記述「赤星研造を試験主任とし、本邦開闢以来初めての歯科専門の試験が行はれ……、これに対

し小幡の答弁流るるが如くして試験官をして感動せしめたとはいふ程である」は、以後定説となった。

『東京市史稿／市街篇』第五七巻（昭和四〇年）の明治八年一〇月二日の条「**「**医術開業者へ免状ヲ下付ス**」**には、小幡の受験に関する書類が翻刻されており、演者は昨年の日本歯科医史学会学術大会において、同記載事項を基にそれまで不明だった受験時の経緯について報告した。一件書類によれば、「内務省衛生局とも協議し、東京医学校（現在の東京大学医学部）に依頼して別紙の通り試験が終了したが、免状下付につき指示願いたい」旨の上申書が八年九月二四日付で、東京府知事より内務卿大久保利通宛に出された。それを受け、一〇月二日付で小幡英之助の歯科医術開業を許可し免状を下付するので、本人への渡し方を取り計らうようとの指示があった。「別紙」は試験を委託された東京医学校からの報告書で、小幡の成績は「中の上」と記し、後世伝えられる「……答弁流る、如く」とは言い難い。また、六月二二日付出願書類と修学履歴書、教師保証書（「**「**口科医術卒業証書訳文写**」**）も翻刻されており、

その典拠は、国立公文書館内閣文庫所蔵の『東京府史料』（未刊史料・明治一九年前に編纂）である。

小幡が従学したセント・ジョージ・エリオット（M D、DDS）は、一八七〇年に渡航し、横浜で歯科を開業した。当時のアメリカの歯科医学・歯科医療は、絶大な工業力を背景に義歯材料や器械器具の開発等、発展期にあつた。エリオットは日本や中国の歯科事情について、米国の学術各誌に寄稿している。

明治八年八月発行の『医学雑誌』第四号には、「東京医学会社」構成員一七四名の一人として小幡の名が掲載されており、当時から家塾を開き歯科医術を伝習した。「門下を教育するに倦むことなく、其間に一の秘密をも残さなかつた」と伝えられ、多数の中津出身者が門生に名を列ねている。小幡英之助は生前名利を求めなかつたが、明治四四年、歯科免許第一号者を顕彰し、青山霊園の塋域に石黒忠憲篆額による墓碑が建立された。そして中津公園の銅像の前では、毎年五月の第二日曜日、中津歯科医師会と大分県歯科医師会の方々により、「**「**歯科祭**」**が開催されている。